2023年4月16日
礼　拝

聖書
創世記30章14～24節

30:14 さて、麦の刈り入れのころ、ルベンは出て行って、野で恋なすびを見つけた。そして、それを母レアのところに持って来た。すると、ラケルはレアに「どうか、あなたの息子の恋なすびを少し私に下さい」と言った。30:15 レアはラケルに言った。「あなたは私の夫を取っても、まだ足りないのですか。私の息子の恋なすびまで取り上げようとするのですか。」ラケルは答えた。「では、あなたの息子の恋なすびと引き替えに、今夜、あの人にあなたと一緒に寝てもらいます。」

30:16 夕方になって、ヤコブは野から帰って来た。レアは彼を出迎えて言った。「あなたは私のところに来ることになっています。私は、息子の恋なすびで、あなたをようやく手に入れたのですから。」その夜、ヤコブはレアと寝た。
30:17 神はレアの願いを聞かれたので、彼女は身ごもって、ヤコブに五番目の男の子を産んだ。

30:18 そこでレアは、「私が女奴隷を夫に与えたので、
神は私に報酬を下さった」と言って、その子をイッサカル
と名づけた。
30:19 レアはまた身ごもって、ヤコブに六番目の男の子
を産んだ。
30:20 レアは言った。「神は私に良い賜物を下さった。
今度こそ夫は私を尊ぶでしょう。彼に六人の子を産ん
だのですから。」そしてその子をゼブルンと名づけた。

30:21 その後、レアは女の子を産み、その子をディナと名づけた。
30:22 神はラケルに心を留められた。神は彼女の願いを聞き入れて、その胎を開かれた。
30:23 彼女は身ごもって男の子を産み、「神は私の汚名を取り去ってくださった」と言った。
30:24 彼女は、その子をヨセフと名づけ、「【主】が男の子をもう一人、私に加えてくださるように」と言った。

説教

心に留めてくださる神

創世記２９～３０章は大変複雑な、又、妬み、争い、
罪のドロドロした人間関係が展開しています。
ヤコブを中心に二人の妻、レアとラケル、
それぞれのそばめ、ジルパとビルハ。
姉妹であるレアとラケルの壮絶なヤコブの取り合い、
出産競争のバトルが展開されています。

自分の意思で結婚が出来ない、自分の意思に反して結婚しなければならない時代に生きた女性たちの悲哀と苦悩。
レアは自分やヤコブの意思に反してヤコブに嫁がされ、
ラケルは好きなヤコブと結婚出来たものの、
先に姉が妻の座に座って、次々と出産し、
ヤコブから愛されているもののラケルは不妊の苦しみ
悩みの中で生きて行かなければなりません。

聖書はこのような理不尽な社会、そこに生きている欲深い貪欲な人々、その結果
希望通りの人生が送れない悲哀と苦しみ、
そんな中で如何に信仰に生きたか、
神は如何にこの人々を導いたかのドラマが展開されています。
社会の強者が支配している時代で、虐げられている弱者が如何に生きるか、主は弱者を如何に守られるか、学んで行きたいと思います。

ヤコブはラケルを愛してラケルの父、ラバンに対し7年しもべとして、ただで働きますので報酬としてラケルを妻に下さい、と申し出ます。
７年奴隷の様に働いてラケルと結婚出来ると期待したのに、結婚の夜、深夜の暗闇の中のテントに待っていたのは姉のレア。朝の光でラケルではないことにヤコブは気づく。

ラバンに抗議をすると、この地方では姉から先に嫁がせる。ラケルがほしければもう7年、ただ働きをしなさい。１４年ただ働きをさせるラバンの計略にヤコブは乗せられてしまいました。

ここでヤコブは我慢してレアを妻として、ラケルをあきらめるか、一夫多妻にはなるがラケルも妻に迎えるか。

レアとは離婚してラバンに返してラケルを嫁にもらうことはラバンは承知をしないと、この選択はあきらめています。

結果的にはレアから
ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルンの６
男子とディナと言う女の子、計７人の母。
レアの女奴隷ジルパから、ガド、アシェル。
ラケルの女奴隷ビルハから、ダン、ナフタリ。
ラケル自身から
ヨセフとベニヤミンが生まれています。
ベミヤミンを産んだとき、ラケルは難産で出産直後に
死んでいます。

このヤコブの女たちを思うと
戦国時代の女性たちが思い浮かびます。
信長の妹で浅井長政に嫁いだお市の方と三姉妹。
明智光秀の娘で細川忠興に嫁ぎキリシタンとなった細川ガラシャ。
更には自由に生きられないため１１５名のいのちを奪った北朝鮮の元工作員金賢姫などを思い起こします。
彼女も自分の自由意志で工作員になったのではありません。

織田信長の妹、お市の方は政略結婚で小谷城の浅井長政に嫁ぎます。茶々、初、江の3姉妹を産みます。万福丸という男児も産んでいます。
信長が越前の朝倉義景を攻めたとき浅井長政は同盟の朝倉義景を助け、信長と戦い、その後、姉川の合戦で信長、秀吉の攻撃に遭って浅井家は滅亡、お市の方は三姉妹を連れ柴田勝家と再婚。秀吉は男の子、7歳の万福丸を処刑しています。お市の方はこのことで秀吉を赦せない人物としています。

お市の方は夫長政と共に兄、信長と戦わなければならなくなっています。
再婚した柴田勝家が賤ヶ岳の戦いで敗れたとき、秀吉はお市の方を側室に迎えようとしましたが、幼い息子、万福丸を処刑した秀吉を赦すことが出来ず、三姉妹は救出されましたが、お市の方は勝家と共に越前の北之庄城で自害しています。

細川ガラシャは明智光秀の娘であります。
政略結婚で細川忠興と結婚。
本能寺の変で父明智光秀は信長を暗殺。
明智光秀は三日天下と言われ、反撃してきた豊臣秀吉に天王山の戦いで敗れて殺されています。
細川家の中でガラシャの立場は厳しくなり
味土野に幽閉され、細川忠興は５人の側室を持ち、
その後高山右近の伝道などでキリシタンになりました。

秀吉の死後、関ヶ原の合戦の前、細川ガラシャを西軍の人質に取ろうと石田三成が細川邸を攻めたとき、切腹という自殺は出来ないので、細川邸が焼け落ちる前、部下の介錯でいのちを断っています。

人が自分の希望通り、意思通りに生きて行けない時代、強者が弱者を支配して、弱者は虐げられて生きなければならない時代、不自由な時代、人は如何に生きるべきか。

今日、人権が守られ、自由が保障される時代ではありますが、自分の欲のために間違った判断をしてその結果を背負って行かなければならないこともあります。
自由はありましても、天災、風水害、病などで、
自由な人生、希望の人生がゆがめられることは多々ありますが、それを如何に受け止めるべきか。

レアさんは２９章１７節、目が弱々しかった、
と書かれてからだに弱さを持っていたのかも知れません。
ヤコブは妹のラケルが好きだ、ラケルを下さいと言って7年働いているのに、父ラバンはこのレアをヤコブのテントに送って押しつけています。
この時代、父の命令に逆らえなかった時代、レアは従わざるを得ませんでした。

ヤコブの妻になったのに、ヤコブから愛されず、ヤコブはレアの妹のラケルを愛し、婚礼の一週間後、妹のラケルもヤコブの妻になっています。レアには何の落ち度もありません。選択の余地もありません。ヤコブ、ラバンの所為で家の中でレアは姉であるのに日陰の存在、愛されない結婚生活を余儀なくされています。

ラケルは夫ヤコブから愛されているものの、
子供が与えられない、レアが次々と子を産む、
それを見ながら子供が与えられない、妬み、劣等感、
誰にも怒りをぶつけられない悲哀の中で苦しんでいます。

今日でも一夫多妻制が法律で、又社会的に容認されている国があります。
又そのような一夫多妻の生活をしていた方が
信仰を持ってクリスチャンになるケースもあります。
事後の対策、解決は難しいです。

ヤコブ家の悲劇の犯人は誰であるのか、
誰の所為でレアは悲劇の人生を歩まなければならなかったのか。ラケルは怒りの人生を送らなければならなかったのか。
第一の犯人は父ラバン。彼は娘を利用してでも豊かになりたかった男。平気で人をだます男。
貪欲の塊の男。

ではヤコブには責任がなかったのか。
ヤコブもラバンにだまされた被害者、犠牲者なのか。

レア、ラケルをラバンの陰謀で娶らざるを得なかった。
一夫多妻制が当時の社会で容認されていた。
レア、ラケルの姉妹を娶る結果となってしまった。
この事実を受け入れ、好きな、きれいなラケルだけを愛する人生から、両者を愛する夫になるべきであった。多産のレアを愛し、不妊のラケルをも愛するべきであった。闘争している二人の姉妹の間で右往左往しているヤコブ。この間ヤコブはベテルの体験の様な祈りをしていない。

アブラハムは女奴隷ハガルを娶り、イシュマエルが生まれ、サラとハガルの激しい闘争。
アブラハムはハガルとサラに距離を置き、
１４年間、忍耐と祈りの時間を過ごしていた。
自己責任、他者責任で不都合な環境が訪れた時、
逃避、責任のなすりつけをしないで、
悔い改め、祈りの時、神様から知恵をいただく時。

金賢姫さんも自己選択、自由意志、自己責任でテロリストになったのではない。
生きているのが辛いでしょうが、クリスチャンになられて、このようなテロが再発しないように、生き証人として生きることが神様が与えた使命と証しの生涯を送っておられます。

細川ガラシャも信長を殺した光秀の娘、と言う大きな十字架を負いながら、残る人生を信仰に生きています。
「散りぬべき 時知りてこそ 世の中の
花も花なれ 人も人なれ」
主に生かされている使命を知って生きています。

レアは６人の男の子、と一人の女の子を生んでいます。
そのこの名前から、ユダ、主をほめたたえよう。
女奴隷ジルパが子を産んだとき、
ガド、幸運が来たと主を喜び、二人目が生まれた時、
アシェル、なんと幸いなことでしょう、と主をほめたたえています。

さらにレアがもう二人の子を産んでいます。
イッサカル、主の報酬、主の報い
その次はゼブルン
良い賜物、主のプレゼント
夫ヤコブに疎んじられても
主の愛に満たされて生きています。
夫から愛されない、夫にばかり期待しないで、
主を見上げ、主に期待する人生に高められています。

一方、闘争心に生きていたラケル、
女奴隷ビルハがダン、ナフタリを産んだとき、
闘争的な名前をつけています。
主は裁きたもうた、
ついに勝ったと言うレアに対する嫉妬丸出しの人生です。

そのラケルにもついに男の子が与えられました。ヨセフです。もう一人男の子を下さいと祈ってヨセフと名付けています。主はこの祈りを聞いて数年後、カナンの地に帰る旅の途中、ベツレヘムの近辺でベニヤミンを出産します。しかしその出産の時、ラケルはなくなっています。

最後の最後ですが主はラケルの祈りを聞き、ラケルに心を留めてくださって、二人の男児の母になり、ヨセフは試練の末でありますが、飢饉の時、兄弟たちや父ヤコブを救う使命を果たしています。

１０００年ほど時はすぎて、子宝に恵まれないハンナ、
夫の慰めを受けながらも、主に必死で祈って
サムエルが与えられています。

ハンナは祈っています。
サムエル第一１章１１節
「そして誓願を立てて言った。万軍の【主】よ。もし、あなたがはしためのの苦しみをご覧になり、私を心に留め、このはしためを忘れず、男の子を下さるなら、私はその子を一生の間、【主】にお渡しします。そしてその子の頭にかみそりを当てません。」

バプテスマのヨハネの母、エリサベツも不妊の女でしたが、主の恵みで子が与えられた時、主に賛美を献げています。
1:24 25 しばらくして、妻エリサベツは身ごもった。そして、「主は今このようにして私に目を留め、人々の間から私の恥を取り除いてくださいました」と言い、五か月の間、安静にしていた。

マリヤは処女でありましたが聖霊によって妊娠したとき、この卑しいはしためを主が用いてくださって主を賛美しています。

出産する、不妊である、
主の摂理、御計画、主の主権に委ねる信仰が大切
自分の名誉、誇り、能力ではなく、
出産しても、しなくても主の御心を求めて
主をあがめる人生を送りましょう。

理不尽なことの多い世界、
卑屈になったり、人に怒りをぶつける人生でなく、
心に留めてくださる主を信じる道を送りましょう。

祈り。